



# 空の神さま



～平渡敏ショートショート集～

平渡敏

## 『クーリングオフ』

---

「また騙されちゃった」

俺は安酒を飲みながら、壁際に積み上げられた「女にもてるフェロモンドリンク」のケースに目をやった。

10日ほど前に家を訪れたセールスマンは、このドリンクを飲んだら如何に女性にもてるかを言葉巧みにまくし立てた。曰く、彼女いない歴29年の若ハゲ君に春が来たとか、オタク野郎に彼女がいたらまずこのドリンクのおかげだとか……。で、俺はまんまと引っかかったって訳だ。契約書にサインするとき薄々は怪しいと思ったんだけどな。

それでもせっかく買ったんだからと毎日飲んで、好きな女性に告白してみたら、やっぱり振られた。契約書をよく見ると「女性にもてたというのは使用者の感想ですので、そのような効果があることを保証するものではありません」なんて書いてある。もうクーリングオフも出来ないかもしれないな。

「それもこれも親父とお袋のせいだ。まったく、何であんな奴らの子供に生まれちゃったんだ」

俺はつい愚痴をこぼした。

父は飲んだくれで仕事をしなかったし、母はふしだらな女だった。2人は俺が子供の頃からケンカばかりしていた。小学2年生のときに両親が離婚したのだが、これでケンカを見なくてすむと思ってうれしかったのを覚えている。

だが、離婚して俺を引き取った母は、自分の苦勞が俺のせいに思えてきたのだろう。毎日、ひどい虐待をするようになった。俺はまともな教育すら受けさせてもらえず、中学を出たら働かされた。

(だからこんな風に騙されるんだよ、まったく)

「クーリングオフをなさいますか」

いつの間に現れたのか、不思議な老人が話しかけてきた。

「お願いします、このインチキドリンク」相当酔っていた俺は即座に答えた。

「いいえ、私がさせて頂けるのは人生のクーリングオフです」

「人生の？」

「そう、人生をリセットして一からやり直すのです。素敵だと思いませんか」

「それはよさそうですね」

老人の態度にはどことなく超然とした雰囲気があったので、俺は自然と彼の言うことを信用するようになっていた。

「それではクーリングオフをいたします。今度は幸せな人生をお送り下さい」

老人の声を最後に、俺は意識を失った。

気が付いたらまわりは真っ暗闇だった。かすかな意識だけが闇の中を漂っている。

「おーい」「ねえねえ」どこからともなく声がしている。

「おい坊主、わしの子供にならんか」野太い声が俺を引き止めた。

「えっ、あなたの子供にですか？」

「わしの子供になったら、ビシッと育ててやるぞ」

何だか怖そうだ。今度は失敗するわけにはいかないからな。

で、俺は答えた。

「いいえ、厳しいのは結構です」

別の声がした。

「ねえ坊や、私たちの子供になってくれない」

今度は優しくそうな声だ。

「おばさんの子供になったら幸せになれるかな？」

「もちろんよ。とっても大事にしてあげるわよ」

「じゃあ、おばさんの子供になるよ。よろしく」

俺は優しいお母さんから生まれ出ることが出来て、うれしくてたまらなかった。この喜びを表現しようと、精一杯泣き声を上げた。

「オギャー、オギャー」

その頃、天上ではあの時の老人が落胆した表情を浮かべていた。

「悪い奴ほど優しく声をかけてくるってことが、まだ分からないのかなあ」

(了)

わたしの部屋の窓はずいぶん変わった窓でした。厚さが均等でないせいでしょうか。道行く人が太って見えたり、痩せて見えたり。「自動車がこっちに向かってくる」と驚いていると、ぶつかる前にあちらに方向転換。何のことはない、自動車は窓と平行にまっすぐ進んでいたのですが。

お父さんは「作った人が下手だったんだよ」と笑うのですが、家の他の部分にはおかしいところはあります。どうやら、面白半分でそんな風にしたみたいですよ。

その夜、わたしはその魔法の窓を眺めていました。なぜ魔法かといいますと、ある位置から窓に映った自分を見るととてもきれいに見えるのです。普段は神様が福笑いに失敗したと言われていて――これが原因で家に引きこもるようになりました――わたしの顔ですが、その場所から見るとまるで別人なのです。

自分の顔にうっとり。現実でないと分かってはいるのですが、それはやっぱり素晴らしい時間という他ありません。

ふと気付くと、向こうから素敵な男性がこちらを見て微笑んでいます。わたしは驚きました。(やっぱり、魔法の窓なのかしら?)

と同時に、一つ気になることに思い当たりました。

(こちらから見て美しく見える自分の顔は、向こう側からはどんな風に見えるのだろうか?)

わたしの頭の中はそのことでパニックになりました。

(窓に顔が映っているのは、光がこんな風に進んでいるということで.....)

この時ほど学校で物理の勉強をさぼったのを後悔したことはありません。

そのうちに男性はわたしの家の玄関にまわって呼び鈴を押しました。

わたしは思い切って玄関に向かいました。相手が自分のことをどんな風に思っているか、ということよりも、素敵な人に会ってみたいという自分の気持ちを優先させたのでした。

玄関の扉を開けたとたん、わたしはふきだしてしまいました。そう、お分かりでしょうが、彼の顔だってとても素敵とは言いがたいものだったのです。

「こんばんは」

「こんばんは」

彼は新聞代金を集金に来たようでした。わたしはいきなり笑ってしまったことを何とかごまかして、お金を支払いながら、先日の新聞に載っていた記事について話しかけました。彼はそれについて自分の意見を聞かせてくれました。そんな風に話をしているうちに.....

やっぱりあの窓は魔法の窓だったに違いありません。今は夫になったあの時の彼ですが、窓の外からわたしの顔がどんな風に見えたのかだけは話してくれません。

人里離れた山奥に音もなく着陸した宇宙船。そこから下りてきたのは身長2メートルを超える巨大な紫色のN星人だった。

が、しばらくするうちに地球人と全く変わらない外観になった。どこか素朴な雰囲気を残した30過ぎのサラリーマン風の男性。

そう、N星人は擬態の能力を持っているのだ。もっとも、この能力は1度使うと再度使えるようになるまでに約1か月がかかるので、慎重に行わなければならないのだが、今回は上手く変身して、どう見ても普通の日本人になった。

N星人の名前はP。地球生命体の情報を得るのが今回のミッションだ。Pは村に下りてきて、体内に埋め込まれた自動翻訳機を通じて村人に話しかけた。

「こんにちは。はじめまして」

「あっ？ ああ、はじめまして」

村人は警戒心をあらわにして、Pが次の言葉を発する前にそそくさと立ち去ってしまった。

別の人に話しかけても同じような対応。どうやらこのあたりの人は警戒心が強くてよそ者とは話をしたがるらないようだ。

（これでは情報を得ることが出来ないではないか）

やむなくPは大都会東京に出てきて、人々に話しかけたが、こちらはこちらで住民が他人に無関心なため、誰も返事さえしてくれない。

（なるほど。地球では何らかの関連がある人以外とは話をしたがるらないようだ）

そう考えたPは犯罪を犯すことにした。というのも、刑務所という閉鎖された場所は入所者同士の濃密な人間関係を作り上げてくれるので、情報を得るためには格好の場所なのである。

通行人に暴行を働き金銭を強奪したPは、警察に捕まり、裁判にかけられることになった。裁判では徹底的に黙秘した。Pには戸籍も住民票もないのだから黙秘をした方がやりやすかったし、実はN星人は嘘をつくことが出来ないのだった。

というのも、N星においては、はるかな過去に何度かの世界戦争があり、生物滅亡の危機におそわれたことがある。これらの過酷な体験を通じて「戦争や暴虐といった残酷な行為は全て1つの嘘からはじまる」ということに気付いたN星人は、自ら嘘をつく能力を封印したのである。

そのような事情もあって完全黙秘を貫いたPは、囚人3号として刑務所に入ることになった。

刑務所では3人の同房者がいたので、Pは色々と話しかけた。

「皆さんの食べている食糧はどのようなものですか」

同房者は海千山千の前科者たちだ。Pの浮世離れした質問を面白がって、デタラメを吹き込んだ。

「私たちの食糧は米と野菜と宇宙人だ」

「昨日出された肉は確かM78星雲からやってきたとか言っていたよな」

「そうそう、ウルトラ何とかってやつ、あれは旨かったなあ」

「でも、もも肉はあんまり旨くないんだ」

Pの顔はみるみるうちに青ざめた。

N星では、嘘をつく能力が封印されてから長い年月を経て、「嘘」という観念自体がなくなり、同時に嘘を見抜く能力もなくなってしまっていた。

Pは、同房者の嘘をまともに信じ込むことになったのである。

「宇宙人をどうやって捕らえるのでしょうか」

「それが面白いんだよ。強力な粘着テープを使ってね、奴らが宇宙船に走り込もうとするところをゴキブリみたいに……」

Pは恐ろしくてゴキブリがどのようなものかを聞く気にもなれなかった。

(何とか逃げなければ……)

幸いにして地球人に変身した時から既に1か月以上経過しているので、擬態は可能だ。

(そうだ、あの虫になろう)

刑務所に入ってから時々見かけるすばしっこい黒光りする虫に形を変えたPは、建物の隙間から逃げだそうと走り出した。だが、その先には箱形の小さな家が……。

(了)

「上司からは契約打ち切りを言われました」深夜のファミレスで、ガンマレコードの山本は困ったように切り出した。

呼び出された時からある程度予想していたので、驚きはしなかった。デビューCDの売り上げが340枚では仕方なからう。しかも、その内30枚は俺と山本が買った分だ。

「でも、もう一度だけチャンスをもたらしてきました。1カ月後までには是非ヒット曲を書いて下さい。それが出来れば……」

ありがたい言葉だった。山本は俺の才能を買ってくれている。だが、1カ月か……。

山本と別れて夜道を歩いていると、田舎のおふくろの声が聞こえた気がした。「お前も来年は30なんだから、夢みtainなことばかり言ってないで母さんを安心させとくれ」

そろそろ潮時かもしれないな。しかし、これまでの俺の音楽人生は一体何だったんだ。

俺は立ち止まってこぶしを強く握りしめた。

「いいものがありますよ」後ろから声がした。振り向くと中年の男が薄気味悪い笑みを浮かべている。

「この種を蒔いてみて下さい」男は俺に種を手渡して、夜の闇に消えた。少しだけ触れた指先が驚くほど冷たかった。

悪魔との取引ってやつか。俺は自分でも意外なほど冷静に事態を受け入れた。人生最大の岐路に立った俺に、そのようなことが起きるのは不思議ではない気がしたのだ。

家に帰った俺は、早速洗面器を植木鉢にして種を蒔いた。さて、どんな植物が生えてくるものやら……。

翌日。目覚めた俺は、植木鉢からメロディが流れてくるのに気がついた。どこか霧にかすんだような不思議なメロディ。見ると、可愛らしい緑色の双葉がけなげに奏でている。

「いける」俺はすぐに確信した。ミスティというタイトルと適当な歌詞をつけた。

発売されたミスティは、あっという間にチャートを駆け上った。テレビにも毎日のように出演できるようになった。

双葉は毎日、飽きもせずミスティを奏でている。俺がなでてやるとうれしそうに明るい音色で。俺が酒を飲んでそのまま寝てしまうとどこか愁いを含んだ響きで……。

俺はいつしか、双葉にいろんなことを話しかけるようになった。「今日はTSBテレビのサウンドカーニバルに出演したんだ」「通帳に結構な印税が振込まれていたよ」

双葉は、俺の話に答えるかのようにミスティの調べの表情を変える。

(よかったですね) (私もうれしいわ)

俺は、何だか双葉と心が通じ合っているような気がするようになっていた。

そんなある日のこと。俺はファンの女と打ち上げで盛り上がり、彼女をお持ち帰りした。

「わあ、何、これ。可愛い。ミスティのメロディじゃない」女は双葉を見て喜んだ。

双葉の奏でる曲調は、露骨なまでに不機嫌な調子になった。

「ちょっと、いやぁね。こんな暗いミスティは好きじゃないわ」

俺は仕方なく、双葉をベランダに出した。俺が女とベッドに入ろうとすると、窓の向こうから恨めしげなメロディが流れてくる。

「何なの、これ。私、帰るわ」彼女は怒って帰ってしまった。

「おい、いいかげんにしろ」俺は双葉に怒鳴った。双葉は哀愁を帯びた調べで答えた。

「そんな風にしておらしくしてもダメだぞ。せっかくのチャンスだったのに」俺は悔しくて、双葉に背中を向けてふて寝した。

2週間後。俺と双葉は冷戦状態のままだった。そうこうしている内に、ミスティはヒットチャートから消え、テレビでは新しいヒット曲を携えた別の歌手を頻繁に見るようになった。イライラしていた俺は双葉にあたった。

「おい、新しいメロディはないのかよ」

双葉は悲しげにミスティのメロディを繰り返すだけだった。

「うるさいんだよ。いつも同じ曲ばかり」俺は双葉を掴んで引っこ抜こうとした。

一瞬、双葉の奏でるメロディが途切れた。俺は、はっとして、双葉から手を離した。たとえ一時の夢のようなものだったとしても、俺に成功を味わわせてくれた双葉に、こんなことをしてしまうなんて……。

「すまない、悪かった」俺が謝ると、双葉は久しぶりに明るいミスティで答えてくれた。

それから2カ月が経った。だが、俺を巡る状況は悪くなるばかりだった。

俺は色々考えるようになった。双葉は可愛らしいけれども、さすがに植物と結婚するわけにはいかない。もう新しいステップを踏み出さなければならない時なのだ。双葉との関係を一体どうすればいいのだろう。

俺はあの時の悪魔を思って叫んだ。

「もう、終わりにさせて下さい」

すると中年おやじの悪魔が俺の前に姿を現して言った。

「あなたのまいた種でしょう」

(了)

## 6編のツイッターノベル

---

悪魔が僕に言った。妻を殺して欲しければ直接「死ね」と百回言え。「そ、そんなこと1回でも言ったら僕の方が殺されます」。だが僕はいい事を思い付いた。「ねえ、君はとても素敵だしね、魅力的だしね、それに……」と、そこまで言ったところで、僕は首に妻の手の強い力を感じた。……やっぱり……。

満員電車で女性専用車両だけが空いているのはおかしい。僕たち中年親父は立ち上がった。出来るだけ汗臭い格好で女性専用車両に乗り込もう。ツイッターで呼びかけると賛同者が増えた。いつしか女性専用車両に女性はいなくなり、親父専用車両に。空いていてラッキーだけどいいのかな？

マクドナルド価格改定。供給不足のスマイルをゼロ円から100円に。その代わり各メニューは10円の値下げ。金のない俺は無愛想なおばはんから買っているが、スマイルを頼む人も多いらしく、売り上げは上昇しているそうだ。

悪魔は疲れはてていた。今日の間もいつものパターン。「美しくしてくれ」「仕事の成績をあげてくれ」ときて「願いをあと3つ聞いてくれ」だ。願うことがなくなったら「魂をとるのは勘弁してくれ」とくる。それでも悪魔は取引をやめない。何故ってそれが悪魔の仕事なのだから。

今の僕たちに足りないのは笑顔だ。そう思った僕は笑顔伝染運動を始めた。周りの人と目が合ったら笑いかける。どうしたのか聞かれたら、笑顔を次の人にパスしてもらえるように頼む。運動は瞬く間に拡がって、笑顔の人ばかりになった。僕は今、以前の不景気な顔がひどく懐かしい。

僕のペットはカメレオン。体の色で会話する。赤なら「おはよう」。黄色は「ありがとう」。僕は会話パターンを研究して初めての色でも何を言っているのかわかるようになった。今日は顔が緑で体が紫、尻尾はオレンジか。ということは……「そんなしゃべり方するかボケ」……えっ!?

(了)

## 『空の神さま』

---

「なぜ……、なぜお前が……」

背中からの大量出血が床に大きな染みを作っていた。僕が意識を失いかけていたその時、頭の中にこれまでの人生が浮かんできた。

僕は人生に迷うといつも空を見上げてきた。空には神さまがいて、僕が進むべき道を教えてくれるのだ。

その事に最初に気付いたのは僕が小学2年生になった春のことだった。

両親が離婚することになり、「どっちに付いていく？」と聞かれた。僕は父も母も大好きだったので、「嫌だ、これまで通り3人で暮らそうよ」と泣きながら訴えた。けれども、両親の意思は固く、その答えでは納得してもらえなかった。

僕は泣き疲れ、公園のベンチで途方に暮れて空を見上げた。

空には、ちょっと前に植物園で見たパパイヤの木のような形をした雲が浮かんでいた。

(パパ嫌か)僕は不思議な確信を持ってこの暗示を受け止めた。「ママのところについていこう」僕はそう決めた。

会社を経営していた父は羽振りがよかったし、僕も父になついていただけに、僕の決断を両親は意外に思ったようだ。母は「本当にいいの？」と聞き直した。

しかし、しばらくして父の会社は倒産し、父は行方をくらましてしまった。僕は、神さまが間違っていなかったことを知った。

その後も、僕は人生の節目ごとに空を見上げて、ありがたいお告げを受取ってきた。

就職を決めたときは面白かったなあ。商社と銀行、どちらに行くか迷っていた僕の前に、Vサインの形をした雲が現れたんだ。

「ああ、これは勝者つまり商社に行くべきってことだ」僕はすぐに理解した。

入社したW商事では、同僚や上司にも恵まれて楽しくやってきたので、これも正解だったに違いない。

妻との結婚を決めたときも、空の神さまのお告げに従った。それなのに、その妻が僕をナイフで……。

なぜ、こんなことになってしまったのだろう。あの時、確かに神さまは僕に「結婚せよ」とメッセージをくれたはずじゃないか。えーと、どんな感じのお告げだったかな。そうだ、あの時の空にはどう見ても血痕にしか見えない形の雲が現れて……。

(了)

## 『記憶』

---

「あなたの失敗した記憶、恥ずかしい記憶を楽しいものに変えてみませんか？」白衣のK医師は、自信たっぷりに話しかけてきた。

（こんな古ぼけたビルにある小さなクリニックでそんなことが出来るのだろうか）僕は半信半疑だったが、野次馬的な興味もあって質問してみた。

「記憶を消し去るのではなく？」

「そう、もちろん消し去る手術も可能です。しかし、失敗をした記憶というものは、その人の人生の糧となるものです。ですから当クリニックでは記憶消去は行っておりません。記憶を残した上で、加工を加えるのです。夜中にふと思い出して『ああ！』と身もだえてしまうあの記憶、楽しいものになら変わったら素敵だと思いませんか」

Kの声は僕への共感を含んでいるように聞こえた。（私だってそんな悩みを抱えてきたんですよ）と言っているかのように。

僕は、何だかKなら信用できそうな気がして、これまで誰にも話したことの無い秘密を思いきって打ち明けた。

「実は僕、クラシック音楽鑑賞が趣味なのです。ある時、コンサートでモーツァルトのピアノ協奏曲を聴いていたら、滅多に鳴らない僕の携帯電話が鳴り出したのです。うわあ！」

頭を抱える僕の肩に手を置いて、Kは優しく続きを促した。

「……コンサート会場に響くチープな着信メロディ。周りの人の刺すような視線。穴があったら入りたいというのは、その時の僕のための言葉です」

「いやあ、それは大変でしたね。是非私にお任せ下さい。そうだ、こういう風にしてみてもいいかでしょうか？ 携帯電話の着信メロディはトルコ行進曲。演奏が止まって一瞬静まりかけた会場でピアニストが着メロに合わせてピアノを弾きはじめるのです。するとオーケストラも続いて……。客席の人たちの顔もだんだんにこやかになってきて、演奏が終わったときには満場の拍手。『ブラヴォー』とタイミングよく声がかかります」

僕はKの楽しそうな語り口に引き込まれた。

（そう、一度しかない人生、記憶を変えてポジティブに生きてみるのもいいだろう）

Kの申し出た料金は想像していたより高かったので、持ち合わせのなかった僕は一旦帰ることにしたが、気持ちはほとんど固まっていた。

帰り道でトルコ行進曲のメロディを口ずさみながら、Kが話した場面を想像した。一瞬僕をにらみつけた観客がピアノの演奏にびっくりして、その内に表情がにこやかになる。満場の拍手のあとで僕が謝る場面を入れてもらってもいいかな。みんな「いいよ、いいよ」と言わんばかりの和やかな雰囲気の中で。

そんなことを考えていた不注意もあったのだろう。横から飛び出してくる車に気付かなかった。僕ははねられて、腰を地面に打ちつけた。僕が呆然としていると、一瞬振り返った運転手は「しまった」という顔をして逃げ去ってしまった。車のナンバーも見る事が出来なかったし、警察に行っても捕まえてもらうのは無理かもしれないな。

自分で救急車を呼んで病院に運ばれたが、怪我は思ったより軽かったので、1日だけ様子を見るために入院して、すぐに退院出来た。僕は家に帰ってからKに電話をした。

「連絡が遅れてすみません。手術の予約を取りたいのですが……」

「それでは明日の午後3時にいらして下さい」

翌日。指定された時間にクリニックに入ろうとすると、中から見覚えのある男が出てきた。

「あっ」僕が小さく声をあげたので、向こうも気付いて話しかけてきた。

「ああ、昨日は楽しかったですね。交通事故の加害者と被害者が一緒に酒を飲んで、あんな風のうち解けることが出来るなんて。人生は素晴らしい。また、ご一緒させてください」

（なんだ、そりゃ？）僕があっけにとられていると、男は弾む足どりで去っていった。

（あっ、そうか）僕は理解した。奴はあの時の運転手で、ひき逃げをした記憶をここで変えてもらったのだ。

「うーん」僕は記憶を変えてしまうことが正しいことなのかどうか、考え込んでしまった。

「先生、予約をしておいて申し訳ないのですが……」

「わかりました。実はキャンセルされる方も時におられるのです。つまらない倫理観でせっかくのチャンスを棒に振るのは実にもったいない話ですが」

「先生のおっしゃることもよく分かります。おそらくそちらの方が現代社会にマッチした考え方だということも。ですが、僕はこのちっぽけな倫理観と一緒に生きていこうと思います」

帰り際、ふと思いついたことを冗談のつもりで言ってみた。

「ところで、もし政治家なんかがこの手術を使ったら……」

するとKは薄ら笑いを浮かべて言った。

「患者さまのプライバシーは守らなければなりませんので……」

（了）

## 『妙なる調べ』

ものすごい音をたてて東京の郊外に着陸した巨大宇宙船から降りてきたのは数人の緑色をした宇宙人たちだった。駆けつけてきた自衛隊や政府関係者たちの見守る中、彼らの体の緑色は徐々に肌色に変化し、その外観は地球人そっくりになった。完璧な擬態の能力を持っているのだろう。

宇宙人の一人が口を開いた。すると、何とも美しい複音のメロディーが流れ出してきた。もちろん、複音の歌唱法自体は地球にも存在する。モンゴルのホーミーなど。しかしそれらとは全く異なるごく自然な複音で、何だか聴いたことのない楽器によるオーケストラのようだ。どのように発声しているのか見当もつかない。

そのメロディーと併行してスピーカーから日本語が流れる。

「地球の皆さん、はじめまして。私たちはイリス星から参りました。私たちの星に必要な資源をお譲りいただきたいと考えて、二千光年の彼方から訪問させて頂いた次第であります」

どうやら彼らの発する美しいメロディーがイリス星での言葉であって、それを日本語に翻訳したものが流されているようだ。

ただ、言葉こそ限りなく美しいのだが、イリス星人たちの目にはどこか油断のならない光があった。

地球を代表して日本の総理大臣が挨拶した。

「ようこそお越し下さいました。我々は皆様のご来訪を心より歓迎致します」

総理の言葉がイリス語に翻訳されてスピーカーから流れる。

ブーッブブービーバー---

音楽性のかけらもない酷い騒音に、イリス星人たちは顔を見合わせ、笑いをこらえるのに苦労している様子だった。

(何だ、人をバカにしやがって)

総理はできるだけ音楽的に話をしようと気負って発言を続けた。

「私たちの住む日本では、一年が四つの美しい季節によって成り立っています。中でも魅力的なのは春です。春を愛する人は.....」

ガーグバーギャラポン、ブーブガーゴゴ

イリス星人たちは失礼も顧みず声を上げて笑い出した。

総理は地団駄を踏んだ。

(お前ら、いい気になるんじゃないぞ。何が資源を譲り受けたいだ。結局のところ地球を植民地にしたいだけじゃないか)

総理は演説を続けることを断念して、次のプログラムに移行することにした。

「それでは私たち地球人の誇る音楽をお聴き下さい」

オーケストラがモーツァルトのアイネ・クライネ・ナハトムジークの演奏を始めた。

タッタタッタタラタターーン

タッタタッタタラタターーン

すると、なぜだか急にイリス星人たちがそわそわと居心地悪そうにし始めた。困ったような顔をして、近くの者と小声で何事かを話している。そうして、演奏が終わるのを待たず、イリス星人たちは頭を下げてコソコソと宇宙船に戻り、離陸して元来た方角に帰っていった。

集まっていた人たちからは、やんやの喝采が送られた。

「やはりモーツァルトの素晴らしさには勝てないと思ったのでしょうか。我々地球人の文化の勝利です」

総理が声高らかに宣言すると、更なる大きな歓声と拍手がわき起こった。

と、そこに地球外生命体研究所の所長が報告を持ってやってきた。

「イリス語の解読に成功しました。これによりますと、アイネ・クライネ・ナハトムジークの音楽はイリス語で出来ており、その意味は次のようなものです。イリス星人のコンコンチキ。おたんこなすの大間抜け。お前のかーちゃんべそ……」

(了)

## 『食糧』

---

アインシュタインがエネルギーと質量の等価性を論じてから1世紀以上を経て、俺はついにエネルギーの食糧化に成功した。

かねてより、光速に近い速度を実現する加速器という装置を用いて、粒子の質量を1万倍以上にすることが可能であった。

俺は従来の理論を発展させて、エネルギーを一気に増幅させることにより、小さなエネルギーで大きな物体を作りあげること成功したのだ。

その後、生産のスピード化、周辺のエネルギーを効率よく吸収する機械の製作、そういった諸々のことを、俺は順調にこなしてきた。

まだ、現時点では試作品の段階で、安全性などの実験が不十分なのだが、完成すれば、ランニングマシンでゆっくりと1時間走った時のエネルギーで大人1人の1日分くらいの食糧がまかなえることになるはずだ。

この機械が、現在アフリカで発生している食糧危機の救世主になることは間違いない。そうなれば、俺の名前は、野口英世やシュバイツァーらと並び称されることになるだろう。

それだけではない。例えばアフリカには優れたランナーがたくさんいるだろう。彼らが走る時に発するエネルギー——いわばマラソンエネルギー——を食糧にしたら、それを食べた人も足が速くなるかもしれない。いや、実際にはそうならないとしても、マラソンブームの昨今、そういう噂を流せば飛びつく人が多いに違いない。

俺は流れ込んでくる巨万の富を考えて、顔がにやけてくるのを抑えることが出来なかった。

「何をニヤニヤしているの！ こんな下らない機械に熱中して。そんな暇があったら少しはまともに働きなさいよ」

妻の怒り狂った声が響いた。

「いや、ついに出来たんだよ」

「何言ってるの。これまでもさんざん出来た出来たって言いながら失敗ばかりだったじゃないの。あなた、この研究はやめると誓ったじゃない」

妻の怒りはおさまらない。今度は物が飛んできた。

「わっ、危ないじゃないか」

俺は自分の体よりも機械のことが気になった。幸いにも機械には当たらず、壁を少しへこませた程度で済んだが、大事な機械にこんなことをする妻を許すわけにはいかなかった。

「いい加減にしろ」

つい手をあげてしまった。妻に手をあげたのは結婚以来8年間で初めてのことだ。

妻は黙って俺を睨みつけた。

「……………ごめん」長い沈黙のあとで俺は謝った。

「反省しているんだったら、明日からでも仕事を探しに行きなさいよ」

「分かったよ」

不承不承答えると、妻はようやく少しだけ気が済んだ様子で、ボタンと戸を叩きつけながら自分の部屋に引き上げていった。

我に返ってあたりを見回すと、機械から食糧が出てきていた。俺たちが激しくケンカしたエネルギーが物質化したらしい。

俺は妻の態度に腹が立って仕方がなかったので、妻の可愛がっているポチで安全性の実験をしてやることにした。

「ポチ、これを食べてみる」

投げてやった食糧にポチは見向きもせず、犬小屋に姿を消した。

「ちっ、犬も食わねえや」

(了)

### 3編の小噺

---

『時刻表トリック』

「おまたせしました。『新進気鋭の推理作家から西村先生への挑戦状』の時間です。それではY先生から、どうぞ」

「午前8時に京都駅で殺人事件を起こしたはずの犯人が、その2時間後、東京駅で目撃されています。この謎を解いてみてください！」

「うーむ……。これは参りました。瞬間移動したとしか考えられない」  
ビクッ!

『震災』

「今回の震災は我々動物の仲間や人間の皆さんに大変な被害をもたらしました。亡くなられた皆さまには心よりお悔やみを申し上げます。また、被災地の皆様の一日も早い復興をお祈り致します」

くまさんの見事な演説が続いている。

「私たちは東北の皆様のために募金活動をすることにしました」

(えっ? 聞いてないよ)

僕はびっくりした。仲間外れにされているのかなあ?

僕はくまさんの秘書のウサギさんに話しかけた。

「僕も募金活動するよ」

「あなたはだめよ。向こうで見ていて」

「そんなあ、僕だけのけ者だなんて」

「当たり前じゃない、あなたサギなんだから」

「ふ、風評被害だあ」

『女か虎か』

(F・R・ストックトン作『女か虎か?』のパロディです。原作をご存じない方はまずそちらを)  
「ついにこの日が来た」俺は身震いをした。この闘技場の2つの扉の内、1つの向こうには絶世の美女が俺を待っているのだ。俺はもう1つの扉、すなわち虎のことは考えないようにした。王女の性格は分かっている。絶対に虎の方を差し示すはずだ。あの勝ち気な女が俺に美女との生活をさせてくれる訳がない。あいつは俺のことをろくに愛してもいなかったのだから。俺はあの女と別れて絶世の美女との生活をするために、わざと王様に俺たちの関係を知らしめてやったってわけだ。さあ、ゲームの始まりだ。王女は右の扉を指差した。俺は迷わず左の扉に向かう。扉を開けた瞬間、俺の目に入ったのは襲いかかってくる虎とその後方で泣き叫ぶ王女の顔だった。

(えっ、まさか?.....ツンデレ?)

(了)

## 『潤滑油』

---

「駅の地下街なんかで四方八方から人が押し寄せてくるような大混雑した場所があるよな」俺は部下に話しかけた。

「ええ、ありますね」

「都会生活にも慣れて、そんなところでもうまく歩けるようになったなあと思っていたんだが、ふと気付いたことがあるんだよ」

「何を気付かれたのですか？」

「俺は普段、周囲の人の流れを読みながらゆっくりと歩いていたんだ。他の人にぶつからないようにクネクネと蛇行しながら。で、他の奴らも当然そうしていると思っていたわけだ」

「はあ」

「ところが違ったね。かなりの方が周りなんか気にせず自分勝手にまっすぐ歩いているんだ。俺みたいなのが周囲の流れを読んで動いていることで、いわば潤滑油になって衝突事故を防いでいるんだ」

「なるほど。そういった思いやりが大切なんでしょうね」

「でも、何だか腹立たしいじゃないか。連中は相手がよけてくれるのが当然と思ってやがるんだ」

「そうは言っても衝突を未然に防ぐことが自分の安全を守ることでもあるわけですから」

「そういう風にも考えられるが、その時は虫の居所が悪かったこともあって、俺も周りを気にせずに歩いてみたんだ」

「どうなりました？」

「それが意外とぶつかったりしないものなんだよ。潤滑油のおかげで」

「そうなんですか。でも、みんながそうやって潤滑油が減ってしまうと……」

「そこなんだよ。働き者と怠け者のアリって話を知っているかい」

「アリのグループでは8割が働き者で残りは怠け者だって話ですか」

「そう、その8割と2割をより分けて2つのグループにしても、それぞれのグループが8割の働き者と2割の怠け者になる、って奴。そんな感じなんだな。潤滑油だった俺が自分勝手な歩き方をすると、近くの自分勝手野郎が潤滑油になる。で、俺が潤滑油に戻るとそいつも自分勝手に戻る。うまくできているんだ」

「確かにそういうものかもしれませんね」

「俺はここに教訓があると思ったね。潤滑油みたいなことは人に任せておけばいい。卑屈な生き方なんてまっぴらごめんだ」

「そうですね」

「強気にまっすぐ行けばいいんだよ。他人に遠慮なんかせずに」

「なるほど」

俺は近くにあった電話の受話器をあげた。

『私だ。我が国には貴国の基地はいらないので、撤去して頂こう』

「しゅっ、首相！」

(了)

## 『エスカレーター』

---

「課長のバカヤロー。偉そうに威張りやがって……」

会社からの帰りに一杯ひっかけて、駅の長いエスカレーターに乗ったところで、つい愚痴が声に出してしまった。

「しまった」と周りを見回したら、自分のすぐ前にくたびれた感じの中年オヤジがいた。

聞かれてしまったらどうか？ まあいいや、本当のことなんだから。しかし変だぞ。さっきは俺の前に人なんかいなかったはずなのに。いつの間に現れたんだろう。

そんなことを考えているうちにエスカレーターは上のフロアに近付いてきた。すると、前のオヤジの体がだんだんと小さくなってきた。まるでエスカレーターの段差がなくなってくるのに合わせるかのように。そして、オヤジは乗降口の間隙に吸い込まれるようにして消えてしまった。

俺は自分の目を疑った。あれは幻覚だったのだろうか。そんなに酔っているつもりもなかったのだが……。何だか納得がいかないまま家に帰ったが、家に帰ってかみさんに怒鳴られているうちに、いつしか忘れてしまった。

翌日の帰宅時、しらふの俺は前日のことを思い出しながらエスカレーターに乗った。すると、予想どおりというべきだろうか、またしてもあのオヤジがいきなり俺の前に現れた。しかも、今度は奴の方が酒を飲んでいるらしく、真っ赤な顔で気持ちよさそうに鼻歌を歌っている。音程がデタラメなのでよく分からないが、スーダラ節のようだ。

「ご機嫌ですね」

何だか操られたように声をかけてしまった。

「いやー、人生ってホント楽しいねえ」

オヤジは振り向いて、実に幸せそうに返事をしてきた。そんなこと言われても俺のはそんなに楽しくもないんだが……。

「そうですね。楽しくお酒を飲めるっていいですよ」

俺はお愛想を言って、少しゆがんだ笑いをオヤジに向けた。オヤジは満面の笑みを浮かべながら小さくなって、手を振りながら乗降口に飲み込まれていった。

うーん、幻覚ではなさそうだが、さて、それでは一体……。

更に翌日。注意して見ていると、オヤジはミニサイズで乗降口からはき出されてきて、エスカレーターの段差が大きくなるのに比例するように大きくなっている。道理で突然現れたように見えるわけだ。

オヤジは頬についた口紅のキスマークをハンカチで拭きながら、俺の方に振り向いて話しかけてきた。

「こんばんは」

「あっ、こんばんは。あの……、あなたは一体何者なんですか？」

色々聞きたいことはあったが、とりあえず根本的な質問を試してみた。

「もうおわかりでしょう。私はエスカレーターの住人です」

「エスカレーターの？」

「そう、なかなか楽しい所ですよ」

オヤジはうっとりした目を上の方に向けた。おおかた先ほどの情事を思い出してでもいるのだろう。俺は少しうらやましくなった。かみさんとは随分と長い間セックスレスだし、浮気をするような相手もない。

「そんなにいい所なんですか？」

「ええ、あなたもおいでになりますか？」

「えっ、いいんですか？ 行きます」

思わず即答してしまった。まあいいだろう、会社にも家族にも別段未練があるわけではないのだから。

エスカレーターが上階に近づいた。

すると驚いたことに、オヤジは小さくならず、上のフロアですたすたと降りて行ってしまった。その代わりに俺が小さくなって乗降口に吸い込まれた。

エスカレーターの中は暗くてじめじめしている。俺は急に不安になって周りを見回した。中には小さな部屋があってどうやらここで寝起きするらしい。部屋の隅には口紅が転がっている。

俺は全てを理解した。

やられちまったな。まあ仕方がない。俺もカモを探すしかないのだろう。あのオヤジがやったみたいに。

(了)

## 『指導』

---

「もう、あの子ったら。楽をすることばかり考えて『俺は給料のために苦勞する人生なんてまっぴらだ』なんて言うのよ。このご時世なのに就職活動をするでもなし、競馬場に入り浸りで……」

先ほどから続いているトモコの愚痴はいつまでたってもおさまる気配を見せない。

ヨシオは新聞紙から顔を上げ、眠たそうな声で相槌を打った。

「ふーん、そうなんだ」

「そうなんだじゃないでしょう。あなた、私の話をちゃんと聞いているの？ あの子のことだって、元はと言えばあなたがしゃんとしないから。そうよ、上司に辞表を叩きつけて格好良く会社をやめちゃって、いつまでたっても再就職はしないし……」

ヨシオは突然自分に矛先が向いてきたので慌てた。

「いやまあ、それはしっかりさせんといかんな」

「そうでしょう。あなたの方から苦勞しろって言い含めてやって下さいな」

「わかったよ」

ヨシオはとりあえず話が終わったことにほっとして、新聞に視線を戻した。

明るく朝、競馬場に出かけようとする息子をヨシオは引き止めた。

「お前、競馬ばかりしているんだって？」

「ああ、そうだよ。親父だって就職もしないでパチンコに行ってるじゃないか」

「バカ。父さんは次の仕事に就くための深い思索の日々を送っているんだ」

「あんなうるさいところで何が思索の日々だよ」

「心頭を滅却すれば火もまた涼しって知らんのか。ああいうところだからこそ本当の集中ができるんだ」

「でも、その無精ひげとぼさぼさの髪の毛、とても真剣に考えているようには見えないんだけど」

「お前、空手家が山籠りをしているのを見たことがあるか」

「いや、ないけど」

「そうだろう。修行のための山籠りで髪を切ったり髭を剃ったり出来ると思うか」

「うーん、まあ、そうかもしれないけど。でも、ハローワークとか行ってんのかよ」

「父さんの就職は一世一代の大勝負なんだ。そんなにちまちまとハローワークなんかに通えるわけがないだろう。精神と肉体が最大限に高まったその時、父さんは本気の勝負に出るんだ」

「そうか。俺、何だか感動したよ」

次の日。

「何だかあの子、目の色が変わっていたわ。お父さん、苦勞しろって言い含めてくれたのね」

「ああ、黒を白って言いくるめてやったよ」

(了)

## 『袖』

---

「Aさん、好きなんです。付き合ってください」

「ごめんなさい。あなたのようなタイプ、好みじゃないの」

僕はあっさり袖にされた。いや、慣用句としてではなくて、本当に袖になってしまったのだ

。

僕は驚いてAに話しかけた。

「袖になっちゃったよ」

Aは別に驚いた顔も見せずに「そう。じゃあ、これからよろしくね」と答えた。

「驚かないの？」

「あなたの前にも袖にした男性がいたから。今、出ていった人」

そういえば、さっきそんな人を見た気がする。

「僕が袖になったので、入れ替わりにそいつは人間に戻ったってこと？」

「そうよ」

袖になってしまったとは言え、Aとずっと一緒にいられるのはうれしいことだった。

離れているのはAが袖のある服を着ていない時だけだ。着替えやトイレはノースリーブの格好になってからするので、僕のエッチな妄想は実現しなかったが、それでもいつも一緒にいるのだから時には眼福にあずかることもある。僕は何だか袖にされてよかったなあと思うようになっていた。

しかし、その幸せも長くは続かなかった。四六時中一緒というのはAにとって緊張感をなくしてしまうことになるのだろう。僕は見たくもないAの姿を見るが多くなった。ソファに寝転がってポリポリお尻を掻きながら雑誌を眺めていたり、下らないテレビ番組にバカ笑いしていたり……。おならだって平気です。

「出るものは仕方がないけど『失礼しました』くらいは言ったら？」僕は抗議した。

「何言ってるのよ。あなた袖なのよ。物の前でおならして『失礼しました』なんて言う人いないでしょう」

「……………」

僕はどうも分が悪かった。

ある日、Aが仕事を終えて家に帰る途中の事だった。向こうから来る男性が素敵な女性を袖にしている。

(何であんないい女を……。神様は不公平だ)

そんなことを思っていると、Aは男性とすれ違い、僕は袖の彼女と少し触れ合うことが出来た

。

「袖振り合うも多生の縁ってやつですね」と言うと、彼女はにっこり微笑んでくれた。

「何浮気してるの」相手が見えなくなってからAは怒ったように言った。

「浮気って……。そもそも君が僕を袖にしたからこんなことになったんだぞ」

「でも、私と一緒にいるんだから他の女性に声をかけるなんて失礼でしょう」

「分かったよ。じゃあ君も他の男とは話すなよ」

「何言ってるの。私は人間であなたは袖なのよ。対等だと思ってもらっちゃ困るわ」

「……………」

そんなこんなで僕は袖でいることが嫌になってきた。

「もういやだ。お願いだから人間に戻してくれ」僕はAの袖にすがった。と言っても僕が袖なのだけど……。いや、そんなことはどうでもいい。とにかく戻してもらわないと困るのだ。

だが、Aはつれなかった。

「袖を人間に戻すのは無理なのよ。また私に言い寄ってくる人がいたら、その人を袖にして、あなたには出て行ってもらえただけど……」

「そうか、誰か言い寄ってくればいいんだ。じゃあ、早く男を引っかけてきてくれ」

「引っかけるなんて、人間きの悪い……。もっと言いようがあるでしょう。君の魅力で惹きつけてやってくれとか」

「そうだな、じゃあそれで頼むよ」

だが、なかなか思ったように言い寄ってくる男は現れない。それはまあそうだろう。普通の女性にとって男性から告白されるということは、そう度々あるイベントとは言えないはずだ。

そんなふうに日々が過ぎていたある夏の日。

Aは仕事のお昼休みに、ジャケットを――袖である僕ごと――椅子の上に置いて、ノースリーブの服でお昼ごはんに出かけた。僕としてもいつも一緒にいると窮屈なので、一人になれる時間はうれしい。お弁当を食べている女子社員に話しかけたりしながら、のびのびと時間を過ごした。

昼休みが終わりかけた頃、Aが男と一緒に戻ってきた。あまりパツとしない感じの野郎だ。Aは部屋の入口で「じゃあね」なんて言って、男に手を振っている。

僕は驚いて「あいつ、誰なんだ？」と尋ねた。

「私の彼よ。さっき打ち明けられたの」

「ちょっと待ってくれよ。全然魅力のなさそうな奴じゃないか。そんな奴振って僕を人間に戻してくれたらよかったのに」

僕が訴えると、Aは素肌があらわになっている自分の腕を指差して言った。

「ない袖は振れないわ」

(了)

空の神さま ～平渡敏ショートショート集～

<http://p.booklog.jp/book/45147>

著者：平渡敏

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lotyuou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45147>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/45147>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.